

あい
愛

「わたしはあなたを愛しています」、「生きとし生けるものへの深い愛」というように、「愛」は、私たちの心の美しいはたらきを指す言葉として使われます。

しかし、仏教における「愛」という言葉は、そのような意味として使われていないのです。

仏教での「愛」は、例えば喉がカラカラに渴いた人が水を求めるような、激しい欲^{よくぼう}望^わのことをいいます。「愛」は、満足することを知りません。水を飲めば飲むほど、より渴^{かわ}きを覚え、また水を欲してしまうようなものです。

心の動きを深く見つめたお釈迦さまは、「愛」について、次のように述べています。

「愛^{うれ}より愁^{しょう}いは生^{おそ}じ、愛^{うれ}より怖^{おそ}れは生^{しょう}ずる。

愛^こを超えた人^{うれ}には愁^こいなし。愛^こを超えれば、怖^{おそ}れも消え去りゆく」

なぜ、「愛」から愁^{うれ}いや怖^{おそ}れが生^{しょう}じるのでしょうか。

それは、仏教では、自分への執着（しゅうじゃく）の心を「愛」ととらえているからです。「愛」は自分中心のころなのです。おのれの思い通りに、他者は動いてくれません。自分中心の「愛」を抱^{いだ}いてるかぎり、自分の欲望と現実とのギャップに苦しむのです。

仏教では、「愛」は乗り越えるべき自分中心の欲望のことなのです。

ですから「愛」という言葉は、ずっと否^{ひていてき}定的な意味合いで使われてきました。

では、なぜ否^{ひていてき}定的に使われてきた「愛」という言葉が、現在のような積極的な意味にかわったのでしょうか。

それは、キリスト教の影響だと考えられています。

聖書に記^{しる}された、「アガペー」という、神よりそそがれる最高の愛情を、当初は「大切」や「懇切」と訳していました。本格的にキリスト教が入ってきた明治期以降、「愛」という言葉が訳語として採^{さいよう}用されたのです。しかし、この「アガペー」の訳語として用いられた「愛」は、すぐに浸^{しんとう}透したわけではないようです。

明治時代のキリスト教の教会で、神父が「神とは愛である」とお説教をした際に、聴衆のほとんどが首をかしげ、強い違和感を示したというエピソードが残っています。当時の人々の心には、仏教的な「愛」の使われ方が根^{ねづよ}強くあったのですね。

それが、キリスト教の日本社会への定^{てい}着^{ちやく}により、徐々に長い時間を経て、現在の積極的な意味をもつようになったのです。

「愛」は素晴らしいものですが、気をつけていないと、仏教の説く自己中心的な「愛」がむくむくと生^{しょう}じてきます。

「愛より愁^{うれ}いは生^{しょう}じ、愛より怖^{おそ}れは生^{しょう}ずる。」このお釈迦さまの言葉をゆっくりかみしめたいものです。

— 終 —